

マクリ一発

二階堂 元重

これまで観た中で一番面白かった映画は何かと聞かれたとき、私は常々邦画だったら「切腹」(1962年小林正樹監督)と「砂の器」(1974年野村芳太郎監督)だと答えるようにしていたが、先日NHKのハイビジョン特集で脚本家橋本忍のロングインタビューをやっていて、どちらも彼の作品であることを知り大変驚いた。それどころか「羅生門」「七人の侍」から「白い巨塔」「八甲田山」まで約36年間に70以上の作品を手掛け、現在89歳になってもなお「私は貝になりたい」のリメイクにまで取り組んだ怪物だ。

普通映画を観るとき脚本は誰かなどまず気にしないし、クロサワにしてもキューブリックにしても作品の出来で示されるのは監督の名前だろう。ということで早速彼の著書「複眼の映像—私と黒澤明」を買って読んでみた。脚本家は映画の設計者だそうだ。全編生みの苦しみ、監督との確執、ジレンマ。肺TBで病弱にもかかわらずよくぞこれだけ戦後日本の名作ばかり書けたものだ。1年に約2本のペースである。

世の中には「宇宙人」が何人かいる。モーツァルトや手塚治虫はそうだったに違いないと思っているがこの人もそうだ。

インタビューの中では「砂の器」を取り上げ、モチーフは「壺坂靈驗記」だと言っている。浄瑠璃文楽の人形の動き、三味線そして義太夫の語りがピタリと重なり完成された芸

術となっている。

映画では、親子の旅、交響曲「宿命」、そしてこれに真骨頂丹波哲郎の朗々たる語りが三位一体となってラスト40分を一気に突っ走る。橋本氏はこれを「マクリ一発」(競輪用語で、最初ゆっくり最後1周乾坤一擲深いパンカーのてっぺんから一気に駆け下りゴールまでブッチ切るという意味。)と呼んでいる。何度観ても涙が止まらない。よく見直してみると「切腹」も手法は同じだ。物語はラスト40分、仲代達矢が事件の顛末を粛々と述懐していきつつ一気にクライマックスまで展開する。三味線の代わりの琵琶と拍子木が実に効果的でこちらの方がむしろ浄瑠璃っぽい。光と影の使い方が素晴らしく昭和37年のモノクロ作品とは思えないほど鮮やかだ。カンヌに出品され審査員特別賞を受賞しているが、我々日本人の琴線に触れ心を深く揺さぶってくれるのは実は橋本氏の計算されつくされたシナリオのせいなのかもしれない。

それにしても丹波・仲代の「語り」は人間国宝級だ。低音で力強くゆっくりと語られる文語調のセリフは聞いててなんとも心地よい。「切腹」にいたってはまさに浄瑠璃言葉で難解であるが、(こんな時DVDでは視覚障害者向けの日本語字幕が使えてとても便利だ。)この辺にも橋本氏独特のこだわり、即ち観ている者に決して妥協しない完全主義者の姿勢がみてとれる。

彼のデビュー作は「羅生門」。芥川の「藪の中」を下敷きに「雌雄」という脚本を書き、当時の黒澤さんに見せたところ短すぎると言われ無理やり「羅生門」をくっつけることを提案。散々悩んで納得いかないまま持って行ったところ、特にラストを大幅に直され今の作品になったようだ。結果カンヌでパルムドールを獲っている。本人は面白くないようだ。

脚本家は自身の意図と監督、制作者、制作会社それぞれの思惑の狭間で揺れ続けている。橋本氏は「砂の器」を当時の松竹に認めてもらえず、橋本プロダクションを設立している。クロサワにしても晩年寡作だったのは思い通りの作品に仕上げるのにお金が足りなかったせいだと述べている。

70余の作品の中で100%満足だったものなんてあるのだろうか。当たる映画と良い映画の間に立って病弱な体に鞭打ってさぞや苦しみ抜いてきたのだろうが、それを全く感じさせないほどカクシャクとしている。だから怪物なのだ。

近年良質な邦画が出てこないとお嘆きの貴兄、よく聞けい。

一度原点にさかのぼって橋本ワールドで「マクリ一発」を是非堪能していただきたいと思う。

